農業水利偉人伝 11

箱根用水に匹敵する
荒瀬井堰を完成させた

小笠原長胤

おがさわら ながたね

荒瀬井堰頭首工

奇世の仕業、
天工の自然に
なるがごとし

貝原益軒の「豊国紀行」より

小笠原家 家紋

中津城

年号	元号	年齢	出来事
一六〇〇年	慶長五年		中津城藩主に細川忠興着任（九州探題扱い）
一六〇一年	慶長六年		慶長検地により、農地の実情を正確に把握
一六一五年	寛永二年		井堰開削を企画するも実現できず
一六三二年	寛永九年		中津城藩主に小笠原長次が着任（九州初の譜代大名の任用）
一六六六年	寛文六年		小笠原長次病没
一六六七年	寛文七年		長次の次男である小笠原長勝が藩主に就任
一六六八年	寛文八年	0歳	小笠原長章（長次の長男）の長男として誕生
一六八二年	天和二年	14歳	小笠原長勝病没
一六八三年	天和三年	15歳	第三代藩主に就任
一六八五年	貞享二年	17歳	井堰開削事業開始決定
一六八六年	貞享三年	18歳	荒瀬井堰着工
一六八九年	元禄二年	21歳	一部通水開始
一六九〇年	元禄三年	22歳	江戸城奥詰衆に就任
一六九七年	元禄一〇年	29歳	荒瀬井堰竣工
一七〇九年	宝永六年	41歳	小倉藩で死去

荒瀬井堰　貞享3年（1686年）～元禄10年（1697年）

荒瀬井堰水路古絵図（荒瀬井堰土地改良区）

小笠原長次（ながつぐ）は寛永９年（1632 年）に中津藩主になりました。

寛永 18 年（1641 年）頃には、下毛原（しもげばる）台地（現在の中津市三光から中津市街地にかけての台地）の農民の間で下毛原台地に山国川の水を引いてほしいという機運が高まり、藩主長次も検討を始めましたが、世継ぎを巡る家臣団の分裂から計画は頓挫し、着工に至らぬまま、寛文６年（1666 年）に病没してしまいました。

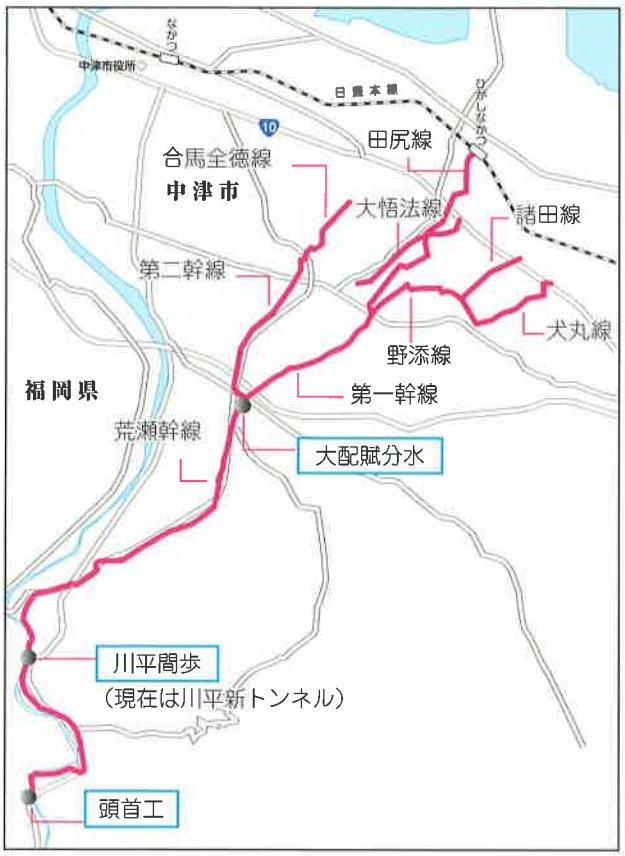
次に二代藩主となった小笠原長勝（ながかつ）の代では、藩財政が逼迫してしまい、井堰開削の計画は検討されることはありませんでした。

その後、天和３年（1683 年）、三代藩主に小笠原長胤（ながたね）が就任しました。長胤は藩政に心を配っておりました。好機到来とばかりに、今津組大庄屋今津作右衛門、蠣瀬（かきぜ）組の蠣瀬庄右衛門、佐知組の佐知条右衛門らが中心となって、井堰工事を藩に熱心に陳情をしました。

そのころの中津藩には、山国槻木（つきのき）（山国町）の草本（くさもと）金山を開発した鉱山奉行の片桐九大夫や、測量計画ですぐれている内海作兵衛などがおり、土木工事の技術者にも恵まれていました。

そこで、長胤は貞享２年（1685 年）に工事の着工を決断し、翌年から着工しました。工事の総司役として竹内求馬（うぬめ）、指南役に片桐九大夫、測量設計に大工頭の内海作兵衛、工事監督に大庄屋の今津作右衛門、蠣瀬庄右衛門、佐知条右衛門らを任命して工事を進めました。

荒瀬堰起原之碑



荒瀬井堰位置図

着工から３年後、元禄２年（1689 年）に荒瀬井堰の本溝ができた後、今津・ 蠣瀬・佐知の大庄屋らが中心となって工事を継続し、最終的に元禄 10 年（1698 年）、荒瀬井堰及び枝溝までの水路が完成しました。

完成した荒瀬井堰は、本耶馬渓町樋田（ひだ）で山国川から取水し、水路約 15km（うち、隧道 2km）によって「下毛原」とよばれる丘陵地約 1,000ha をかんがいしました。

その後、奥平氏が中津藩主なってからは、藩が井堰の補修や管理を指導するようになり、施設管理の充実や、水利用の公平化が進み、上流と下流の対立争いの裁きや仲介などの自主管理規定として「明和規定書」ができました。

明和規定書

今津家古文書

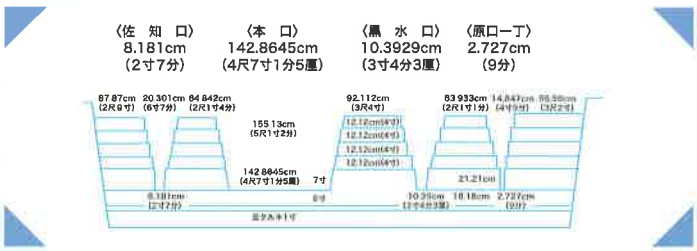
「明和規定書」は用水が有効に使われるよう、井堰の修復や、用水の管理に関しての規定をしたものです。その他にも運営上の経費や夫役の負担について、今津組が73町２反、佐知組が30町７反、蠣瀬組が11町１反という「定畝割（じょうせわり）」を決めました。

この規定書は明治のはじめまで、200 年の間変わることなく守られ、現在の用水管理の基礎となりました。

大配賦分水

明和元年（1764 年）に設置された、分水口の配賦板（仕切り板）は、近代的なほ場整備がされた現在でも、300 年前と全く同じ寸法で使われています。

今でも、毎年５月の通水時には水神祭を行った後、この配賦板によって取水をしています。



名門「小笠原家」

中津藩小笠原家は、世間では「小笠原流」として知られる射（弓）、御（馬）、礼の三法すべてを糾（ただ）す「糾方宗家（きゅうほうそうけ）」にあたり、古来武門随一の誉れ高い名門でした。

古くは鎌倉時代、将軍源頼朝の師範となり、各種作法を定め、その後も小笠原家は執権北条氏の師範として代々管領・守護職を継承してきました。

その後も後醍醐天皇、足利将軍の師範となり、戦国時代には相続争いによる混乱もあったものの、徳川家家臣となった後は戦功を上げ、重臣として活躍しました。

流鏑馬（やぶさめ）

初代藩主　小笠原長次

当時使われていた石の樋
（中津市歴史民俗資料館）

初代中津藩主となった小笠原長次（ながつぐ）は、寛永９年（1632 年）に中津藩主として着任しました。当時の中津藩は、前藩主が切支丹禁令のため、転宗を拒んだ多くの住民を処刑し、社会は不安定な状態になっていました。

そのため、長次は民心安定に努め、城下町を整備したり、相原から城下まで石の樋（現在のＵ字溝）によって水道を通しました（御水道と呼ばれています）。

長次は善政を行いましたが、残念なことに相続争いから家臣団が分裂し、荒瀬井堰の開削事業を計画したものの進めることは出来ず、寛文６年（1666 年）に病没しました。

第二代藩主　小笠原長勝

第二代藩主となった小笠原長勝（ながかつ）は、書や歌に長じた教養人で、当初は善政を行っていましたが、藩主を継承したわずか７年後に病を患い、その後豪遊にふけるようになったため、参勤交代の費用すら困るほどに財政は悪化しました。

収入増を図るために、郡代（ぐんだい）岩波源三郎は様々な重税や経費削減を行いました。しかしながら、一連の苛政により領民の逃散が続出したこともあり、岩波源三郎は幕府から叱責される事態になりました。

長勝はその後、藩財政の立て直しも出来ないまま、天和２年（1682 年）37 歳で病没しました。

第三代藩主　小笠原長胤

第三代藩主となった長胤（ながたね）は、長勝の時代を反省し、善政を行いました。荒瀬井堰の開削事業も、この時に長胤の英断により着工することになりました。

荒瀬井堰の建設には莫大な費用がかかり、藩財政に多大な影響を及ぼしましたが、完成後から現在に至るまで、地域農業の発展に大きく貢献しております。

頭首工
（背景は８連アーチ石造橋の耶馬溪橋）

小笠原家は「長胤」の後、「長円（ながのぶ）」、「長邕（ながまさ）」と続き、その後も播州安志（あんじ）藩（現在の兵庫県姫路市安富町安志）１万石として明治まで続きました。

残念なことに、享保９年（1724年）に安志藩江戸屋敷が火災に遭い、中津藩時代の記録はすべて消失し、荒瀬井堰開削に関わった人々の記録はほとんど失われてしまいました。

このため、箱根用水と並び称されるほどの大事業を完成させたにもかかわらず、小笠原長胤の偉業は人びとの記憶からは消えていますが、下毛原地区の1,000haの農地に水を引いた功績は現在でも大きく、農業水利偉人として改めて評価して良いでしょう。

荒瀬井堰開削工事に関わった主要人物

農民代表　今津作右衛門

地域の惣代格の大庄屋であり、農民掌握に努め、歴代の藩主や代官から厚く信頼されていました。荒瀬井堰完成後、分水路の造成や、藩主に対し水路改修の補助申請をするなど、荒瀬井堰に一生を捧げたと言われています。

草本金山奉行　片桐九大夫

工事推進における技術面の中心人物でした。藩主長胤の絶大な信頼を得ており、難工事を成功に導いた業績はすばらしいものでした。ただし、安志藩江戸屋敷の火災のため、関連する資料はほとんど残っていません。

大工棟梁　内海作兵衛

測量設計において抜群の技量を持った「工匠」であり、小笠原長次の代に行った「御水道」の工事は、現在の技術水準に匹敵するほどであったと言われています。

家老　竹内求馬

総司役として井堰開削事業にあたり、「家臣団の束ね役」として大事業の実行を後押ししました。

奇世の仕業、天工の自然になるがごとし

川平間歩（かわべらまぶ）は荒瀬井堰の難所であった隧道（トンネル）区間です。

中津藩の記録によると、草本金山の鉱山奉行「片桐九大夫」が金山を閉鎖して坑夫150人を率いて参加したとされています。

山国川の水を15kmの水路で下毛原台地に導くため、途中十数カ所の岩山をくりぬくという難工事でしたが、金山坑夫の高い技術が取り入れられたことで、工事に大きく貢献しました。

青の洞門で有名な禅海和尚は川平間歩を参考として青の洞門掘削を決意したと言われており、このことから川平間歩は、「水の洞門」と呼ばれ県史跡に指定されています。

また、「養生訓」で有名な貝原益軒（かいばらえきけん）が著した「豊国紀行」では、「奇世の仕業、天工の自然になるがごとし」と高く評価されています。

完成から292年間通水し続けていましたが、長年の風化などによって落石落盤がひどくなり、昭和56年に新トンネルに役目をゆずりました。

川平間歩

県史跡指定

水の洞門 川平間歩（かわべらまぶ）

荒瀬井堰は下毛郡谷地直坂、山口、鶴居、大幡三郷、如水、和田、今津、旧八ケ村百余町歩（百十町）の水田灌漑の悲願達成のため旧中津藩士小笠原長鳳が寛政三年（一七九一）十月着工、藩の援助を受けた大工事であった。中でも山国川沿いの岩山をうがった「仏坂」川平間歩（トンネル）は堀り賃一坪一銭一升といわれた難工事で、坑夫片桐九大夫に命じて草本金山（現山田町）を閉鎖して採鉱夫百五十人を総動員して三年後の享和二年（一八〇二）三月通水に成功した。ところが、川平間歩（トンネル）は岩質がもろく、永年の風化と近年の交通量増大、振動による落石落盤がひどく、昭和五十六年、新工の総工費三億四千万円の付け替え新トンネルに「水の洞門」の役目をゆずり、二百九十二年間の通水を止め廃坑となった。

幅高さ平均二メートルの箱形で、一番間歩から九番間歩までサイクリング道（旧原鳥渡線跡）に沿って続いていて、土出口や手堀りののみの跡に三百年前の難工事の跡が偲ばれる。

青の洞門（全三十年かけて堀り抜いた禅海はこの「水の洞門」川平間歩の岩盤と堀り方を参考にして四十年間の事業、二十年（一七三五）完工を決意したといわれている。）

昭和五十九年　三月

三光村教育委員会

川平間歩の紹介

荒瀬井堰と青の洞門

小笠原長鳳によって開削された荒瀬井堰ですが、山国川の「青」付近の河原が水没したままになってしまい、「らかんみち」と呼ばれる交通の難所となってしまいました。

諸国遍歴をしていた禅海和尚は、難所で人馬が命を落とすことを見かね、人馬が通行できるトンネルを掘削することを発起しました。

青の洞門

村人や奥平中津藩の援助を受け、約30年後に開通し、日本初の有料道路となりました。

ちなみに、大正8年に発表された菊池寛の「恩讐の彼方に」は、この青の洞門が舞台となっています。今では小説の内容を史実であるように信じている方も多いようですが、実際の禅海和尚は、凶悪な犯罪者ではなく、また地元住民も掘削に積極的に協力していました。

地域用水としての荒瀬井堰

農業用水として集落を巡っている水路は、昔から、野菜や米の洗い水、風呂や洗濯などの雑用水、防火用水など様々な使われ方をしていました。また、魚捕りや水遊びなど、子ども達の遊び場としても欠かせない存在でした。このように、農業だけでなく、様々な利用がされている水を「地域用水」と呼んでいます。

近年は上水道の発達などにより、農業用水としての利用が主となり、その存在が忘れられようとしています。

しかし、荒瀬井堰では、農業用水路を地域用水路として更新、改修をすることで、地域の環境に欠かせない「水」の存在を、地域住民とともに見直しています。

魚のつかみ取り大会

荒瀬井堰土地改良区では、農業水利施設の維持保全を地域社会ぐるみで取り組む体制を確立するため、平成 11 年度から「農業用水機能増進事業」を実施し、「荒瀬水路祭り」などを通じて、地域住民に水路の重要性を紹介しています。

現在も、平成 21 年度から「地域水ネットワーク再生事業」に取り組み、地域の生物多様性、水質、景観、生活環境等を保全するための活動を行っています。

中津市立大幡小学校や中津市立真坂小学校の４年生は、荒瀬井堰の学習を行っています。

荒瀬井堰土地改良区職員や地域ボランティアの方による授業が行われ、荒瀬井堰が大変な苦労と、みんなの協力で完成したこと、今日の豊かな実りは、そのおかげであることを学んでいます。

大幡小学校

真坂小学校

荒瀬井堰では、地域住民が参加した清掃活動が毎年行われています。

荒瀬井堰のその後

改修前の旧井堰

昭和の大改修後の頭首工（昭和 32 年）

新しくなった頭首工（平成 11 年）

長い年月の経過により井堰が老朽化したことから、昭和 30 年代に大改修を行いました。

また、昭和 46 年には水門巻揚装置を動力式に改良しています。

平成 11 年には洪水時における安全なゲート操作が行えるよう、井堰の一部改修が行われました。

近隣に青の洞門や耶馬溪橋（オランダ橋）等の多くの史跡が広がる名勝耶馬溪に位置することから、駆体（支柱）や巻上室を石積風の外観とし、景観に配慮した井堰に生まれ変わりました。

写真中央の記念碑は、荒瀬井堰竣工から220 年後にあたる明治 44 年、頭首工のすぐ上の道路際に建立されました。写真の左部分は、昭和 57 年に建立された荒瀬神社です。荒瀬井堰と水路の守護神として、300 年の間に工事や水の犠牲になった人々の鎮魂の意を込めて祀られています。

参考文献：

荒瀬の歴史（荒瀬井堰土地改良区）
土地改良事業の先覚者たち
（第 8 回全国土地改良大会運営委員会）
大分県土地改良史（大分県耕地課）
水土里を育んだ人びと
（全国農村振興技術連盟）

作成：大分県農林水産部農村整備計画課
協力：荒瀬井堰土地改良区
中津市立真坂小学校
中津市
大分県

印刷：明治印刷株式会社